

インバウンド増加を見据えた実践的な英語学習 ——アメリカ人訪日の機会をヒントに——

阿部 暁帆

1 はじめに——副教材学習のメリット

大学のリーディング・ライティング科目では、基本的にはこれまでテキスト教材による授業を行ってきた。ところが、近年ではいずれの大学においても、単位修得に必要な授業時間数を確保することが厳格化される傾向にある。¹ それに伴って、実質的に授業回数が前後期とも増加するにつれ、従来のテキスト教材による授業及び中間試験や小テストのみでは、授業内容が些か単調になることもあり、授業方法に更なる工夫が必要ではないかと感じられることも増えるようになった。また、それぞれの科目で出される課題の量も総じて多くなっているようだ。授業開始前や終了後の学生たちの様子を見ると、他の授業も含めて分からない箇所について教え合うばかりでなく、次の時限や翌日の授業の課題についての会話を頻繁に耳にするようになったからである。² とりわけ1、2年次生は、ほぼ空き時間なく時間割を組まざるを得ず、そのような状況下で、長時間にわたって学生に学習意欲や集中力を持続させる、つまり授業において常にポジティブな姿勢を求めようとすることは難しいと思われるようになった。

そこで、ここ数年の授業では、毎週のテキスト教材による授業に加えて、1ヶ月に1回程度は、小テスト等の他にプリント教材を作成して使用するなど、テキスト以外の内容を副教材として、授業に組み込むようにしている。様々なトピックをテーマとして取り上げ、変則的な学習形態をとる副教材学習では、グループ学習の時間を多くとることで、学生も自発的に授業に取り組んでいるように見える。そして、グループワークによる副教材学習から生まれた結束力によって、テキスト学習で日常的に行っているペアワークやグループワークにおいても、後で述べるように、より積極的な姿勢が見られるようになった。また逆に、テキスト学習では、理解度や授業の雰囲気に応じて調整するほかは、ほぼ授業のプロセスを一定にしているため、学生は精神的にもゆとりをもって学習することができ、それぞれの授業回ごとにメリハリのついた学習を行うことができる、という相乗効果も生まれているよう

である。

ところで、テキスト学習にあたっては、英文の意味を正確に把握することは言うまでもなく、リーディングで扱われているトピックそのものにも関心をもつよう、日頃から学生たちに促している。昨今ではスマートフォンやパソコンが主要な情報源となりつつあり、個人の趣向に沿った情報ばかりに関心が集中してしまう傾向にある。その弊害として、いわゆる一般的な主要ニュースのトピックでさえ知らない学生も、しばしば見受けられるようになった。しかしながら、様々な情報を得たり多様な知識を身につけておくことは、時にリーディング内容の素早い理解に繋がるだけでなく、広くいえば、情報を取捨選択したり知識を応用したりといった、社会に出てからも役立つ能力にもなりうるといえよう。

従って、副教材として扱う内容についても、世界で今まさに起きていることに学生が意識を向けられるよう、可能な限り旬のトピックを取り上げるようにしている。昨年度でいえば、当時のアメリカ大統領オバマ氏の広島でのスピーチや、ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの歌詞などがそうであった。また、アメリカ大統領選挙に関してグループ発表を行われた際には、その後に学生の間で熱い議論が交わされていた。独立宣言の文言が含まれたオバマ氏のスピーチに触れることによって、学生たちは僅かながらでもアメリカの歴史を遡って学ぶ機会が得られたし、授業初回時にはアメリカ大統領の名前や主要二大政党名を答えられない学生もいたが、次第に大統領選挙の報道を日頃から意識するようになり、各候補者や支持者らの政治的思惑や選挙の仕組みなどについても、多少なりとも理解できたようであった。

ところで昨年末、次年度に扱うトピックについて考え始めていた頃、知り合いのアメリカ人夫妻から、来春に日本を旅行したいという内容のクリスマスカードが届いた。とはいえ、記されていたのは日本訪問の時期のみで、実際に彼らの日本に関する知識もほぼ皆無であったことから、それ以降、目的地や宿泊場所、行程の調整に至るまで、思い返せば数ヶ月にわたってコーディネーターのような役割を果たすようになっていた。だが結果的にこうした経験は、学生が海外からの来訪者と英語でコミュニケーションをとりうる身近な場面の想定につながり、副教材の内容を考えるにあたっては、大いに参考になり役立つものになった。では、どのような経験を授業教材として活かしたのか、次に具体例を挙げて説明していきたい。

2 温泉人気にみるインバンウンド需要とその課題

クリスマスカードに続いて届いたアメリカ人夫妻からのメールには、旅行のおおよその日程に加えて、温泉入浴のために水着を持参する必要があるか、また入浴時にタトゥは問題になるかという疑問が添えられていた。観光庁が行った訪日旅行に関する意識調査によれば、日本滞在中に「今回したこと」では20項目中6番目、「次回したいこと」では同じ20項目中4番目が「温泉入浴」であった(26)。また、アジア地域からの外国人旅行者を対象とした調査ではあるが、「行ってみたい日本の観光地イメージ」では、3位の「富士山」や2位の「桜」をおさえて「温泉」はトップであった(相澤)。かつては公衆浴場で入浴するという日本独特の習慣が敬遠される傾向にあったものの、現在のインバンウンド消費の傾向として体験型の観光に関心が高まっていることも影響しているのか、躊躇いよりも日本の伝統文化や日常生活を体験したいという好奇心のほうが勝っているのかもしれない。実際に温泉施設においても、アジア系の人々のみならず、入浴を愉しむ欧米人の姿も時折見かけるようになった。よって、今回アメリカ人夫妻が温泉に関心を持ったのも驚くにはあたらないことのようにだ。

水着についてはスパのような入浴施設を除いては不要であると彼らに返答したが、タトゥについては少々事情が複雑であった。インターネット上では、例えば道後温泉のように入れ墨(タトゥ)があっても入浴は可能と明言しているところもある。³ だが、そうした施設はほんの一握りで、大半の入浴施設入口の注意事項には、入れ墨のある者は入浴を遠慮するようにという主旨の文言が含まれており、特段注意書きの無い場合でも、歴史的意味合いから暗黙の了解として敬遠される風潮がみられる。だが、近年の外国人観光客の急増や、民族的伝統としての入れ墨の風習などにも配慮して、小さな入れ墨であればその部分が隠れるようなシールを施設側が提供するなど、温泉業界においても試行錯誤の最中のようなのである。公衆浴場で入浴することへ懸念やタトゥの問題など、幾つかの点を考慮すると、日本の入浴事情に明るくなく、また初来日となる外国人に対しては、温泉風呂付きの客室のある宿泊施設への宿泊、もしくは家族風呂のある温泉施設に行くことを勧めるのが無難かもしれない。

先にも述べたように、海外からの旅行者は年々増加しており、温泉の効能や、日本独自の習慣である入浴方法、それに歴史的建造物などへの関心から、

温泉地においても外国人の姿が目立つようになってきた。自身は数年前に登別温泉を訪れたが、それは偶然にも春節の時期で、大半が中国や台湾、韓国からの観光客であった。インバウンド需要を期待してか、登別温泉の彼方此方にアジア地域からの旅行者に向けたもてなしの雰囲気を感じられ、宿泊したホテルでも、中国語や韓国語も堪能な複数のスタッフが対応にあたっていた。そして、名湯らしく脱衣所には絶えず清掃を行う女性がいたが、これから浴室へ入ろうとする中国人女性らに、ここでは日本語と手振りで長い髪を束ねよう注意を促していた。最近では、観光客があまり利用しないようなローカルな公衆温泉浴場にも、温泉の入浴マナーについて英語やアジア圏の言語で書かれた説明が貼り出されていることに気づく。しかし、賑やかに会話をしながら入浴に来た訪問者全てが、入浴前にこうした注意書きに目を通すとも限らない。また、ビジネスホテルやシティホテルの大浴場には説明書きが一切無いところもあり、自身も偶然、入浴方法に戸惑っていた外国人に、簡潔に入浴マナーを伝えるという経験をしたことがある。

海外へ行かずとも、日本国内においても外国人と接触する機会が多くなりつつある今、温泉施設でのこうした出来事は、学生たちにとっても遭遇する可能性が十分あるだろう。海外から訪れた人々をもてなす、と捉えると我々側からの積極的な行動が必要なように思われるかもしれないが、身近に困っている外国人に手を差し伸べる機会は、いつ誰にやってくるとも限らない。そういうわけで、副教材学習の一環として、学生には外国人の温泉体験について学んでもらうことにした。

3 英語版温泉ガイドブックを活用した学習

外国人にも気兼ねなく温泉に慣れ親しんでもらおうという目的から、インターネット上には、温泉入浴のメリットや入浴マナー、旅館、それに温泉地観光などについて英語で説明されたサイトがみられるようになってきた。旅行前のアメリカ人夫妻には、温泉や入浴方法に関するウェブサイトを事前に幾つか紹介しておいたが、授業でもその一部をプリントし教材として配付した。とりわけ2008年の洞爺湖サミット開催を機に、北海道運輸局によって外国人向けに作成された英語版温泉ガイドブック“Welcome to Onsen!!: A Guide for Enjoying Japanese Hot Springs”では、温泉の効能や温泉旅館、温泉でのマナーなどが写真やイラストとともに分かりやすく説明されて

おり、温泉に慣れ親しむ機会の少ない日本人にも役立つような内容となっている。今回はそのなかから、入浴マナーをテーマとした“Let’s Go to the Onsen!”という四コマ漫画について、学生に授業内課題を出した。

課題の内容は、4人1組のグループごとに、8つの四コマ漫画の中から、外国人に教えたいと思う4つを選び、その内容を要約するというものであった。この課題を出した当初の意図は、学生がそれぞれの漫画の内容を理解し端的に説明できるかという単純なものであったが、実際にはより複雑な課題となったようだ。それほど時間をかけずに提出できたグループもあれば、なかなかプリントを埋められないグループもあった。また課題を回収してチェックしてみると、漫画の趣旨を的確に捉えられているものもあれば、課題の目的を達成できていないものもあったが、この課題の難しさには二つの要因があったのではないと思われる。

一つは、要約の正確性と行間を読むという作業である。要約では少なくとも各コマで示されている内容に触れられるべきであるが、4コマのうちの1つの内容を飛ばしたり、内容そのものではなくそれに対する感想が含まれていたりするグループが複数みられ、そのほかに内容を誤解しているものもあった。更に、漫画はリーディングの文章とは違って、吹き出しの会話や説明の分量が限られている。従って要約の際には、コマの間にある空気、つまり行間を読み取ったうえで言葉を補い適当な文章にしなければならぬが、提出された課題には辿々しい要約もみられた。学生たちは、長文について要旨をまとめるという作業には慣れていてのかもしれないが、いわばその逆の作業を行うというのは、一般的な課題とは違って少々難しかったのかもしれない。また、SNSの普及によって、短文や口語体の文章をパソコンやスマートフォンで打つ機会は増える一方、手書きで文語体の文章を書くという機会は減少し、そうした訓練をする学習の機会さえも十分に与えられていないのかもしれない。こうした懸念は、今回の課題に限らず、日頃から提出物を確認する際にしばしば感じられるものである。

そして、もう一つは異文化理解の必要性である。これらの漫画は全て、温泉の入浴マナーや慣習について伝える内容になっているが、必ずしも日本人の入浴スタイルのみが描写されているわけではない。例えば4つの漫画、“No Swimsuit”と“Towel on Your Head”、“Spirit of Consideration”、それに“it is Hot Enough?”の1コマ目で描かれている外国人男性の行動はそれぞれ、

Basket and Locker



Place of Social Relationship



Fig.1. PR Center ed. "Welcome to Onsen!! : A Guide for Enjoying Japanese Hot Springs." Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism Hokkaido District Transport Bureau, 2008. *Hokkaido District Transport Bureau*. www.tb.mlit.go.jp/hokkaido/bunyabetsu/kankou/gaikokuzin/onsenguide/index.html.

水着を着用して湯船に入ろうとする、湯船で体を洗う、立ってシャワーを浴びる、それに彼らにとっては熱すぎる温泉に加水しようとする、いずれも多く外国人に共通する入浴習慣が反映されたものであった。また“Basket and Locker” (Fig.1) の、脱衣カゴを前にして「赤ん坊のためのものだろうか」と外国人男性が首をかしげる描写は、日本人にとっては想定外の疑問であるが、一方で脱衣カゴや貴重品ロッカーが彼らにとっては理解しがたいものであるということに気づかされるだろう。温泉が日本独自の文化であるからとはいえ、一方的に我々の文化を納得させようと説明するだけでは、この漫画を十分に要約できたとはいえない。海外からの訪問者がどのような習慣をもっているかを想像したうえで、彼らの戸惑いを想定し手助けする必要があるということ、学生がこの漫画を通して理解できるようになることが、この課題のもう一つの達成目標となっていたといえるのである。

なお、四コマ漫画のうち“Place of Social Relationship” (Fig.1) については、いずれのグループでも選択されることはなかった。おそらく会話の吹き出しが少なく説明的な表現方法であったため、要約しづらかったのではないかと思われる。この漫画では、温泉場が社交の場でもありながら、浴場内で外国人に接触する機会が少ないことや内向的な日本人の性向が描かれている。この漫画を目にした外国人訪問客には日本人のこうした気質を理解してもらおう一方、学生たちには、恥ずかしいという気持ちを振り払い、その場の状況に応じて自発的にコミュニケーションをとろうという姿勢を是非示してもらいたい。

4 外国人向け国内旅行プランの作成

アメリカ人夫妻から続いて届いた手紙とメールには、日本への入出国日と訪問を希望する観光地及び周遊順序の予定がだまかに記されるとともに、それらについて色々と言葉が欲しいと記されていた。しかし、2週間に及ぶ旅の予定内容は長々とした文章で綴られていたため、一見して時間的・空間的に把握し難いものであった。そのため、助言に加えて行程表にした幾つかの周遊プラン案を添付ファイルで送ると、彼らはそれに感心し、それ以降は行程表を修正し合いながら旅程について計画していくことになった。

細々とした調整は別として、彼らが作成した旅程表を修正するうえで次のような点に留意したので、授業とは間接的な内容になるが、ここで挙げてお

こう：

- ・外国人にとっては日本での移動の距離感が把握しづらいため、窮屈な行程になっていれば代替案を提示
- ・同方向の目的地が別々の日程に組み込まれて無駄な往復移動等がある場合、行程をそれぞれ一つにまとめるように助言
- ・公共交通機関の利便性に乏しい地域を観光する場合、実際に実行可能な行程であるかどうか、時刻表等を確認
- ・日程と観光施設や店舗等の定休日とが重なっている場合は指摘

更に余談ではあるが、最初に大体の日本滞在期間を知らされた際、ゴールデンウィーク期間中の混雑について指摘しておいたのだが、結局日程の一部がゴールデンウィークに重なることとなった。それゆえ、週末のほかゴールデンウィークの宿泊施設はどれも満室ばかりで、予約が困難な日も幾日かあった。近年では海外から日本国内の宿泊施設を予約できる海外版ウェブサイトや英語のサイトも多くなり、利便性が格段に向上した。だが、国内の通常ウェブサイトでの検索結果と比較してみると、ヒットする宿泊施設の件数がかなり絞られてしまうという難点もある。幸いにも、今回自身が途中から同行して宿泊したホテルの多くは、代表者というかたちで全員分の予約が可能だったため、彼らが宿泊に困ることはなかった。

温泉地での外国人と遭遇する可能性に比べれば、海外からの旅行者のためにプランを作成するような機会は、学生にとってはすぐには訪れないかもしれない。だが、都心の電車内で行き先について訪日外国人から尋ねられることも少なくない今日、外国人観光客向けの旅行プランを練ってみるという作業は、日本の地理や歴史、文化、習慣などについて改めて再認識するとともに、海外の人々が日本についてどのような関心を抱いているか、また自分は日本をどのように紹介したいかを想像する良い機会にもなるのではないかと思われたのである。⁴

学生たちには、先に記したプラン作成上の工夫や経験談について説明したうえで、図2のように、実際に使用した旅程表の一部抜粋をサンプルとして配布し、グループごとに旅行プランを作成するという課題を与えた。サンプルの行程表は必ずしもテキストのように完成度の高い文書ではないが、アメ

リカ人とともに作成したものであるため、学生が生の英語テキストに触られる良い経験となったであろう。なお、学生にとってよりリアルなプラン作成のきっかけとなるよう、「日本に来て間もないアメリカ人留学生と知り合い、彼女の家族のために国内旅行プランを提案して欲しいという依頼を受けた」という場面設定にした。作成上の条件としては、家族6人での旅行とし、そのうちの誰か一人が希望している内容を（くじ引きで決定のうえ）プランに組み入れることと、旅程に一つ以上の世界遺産観光を含むこととした。旅行先が重複しないよう、訪問する世界遺産の観光地については授業内のグループワークで決めて報告させ、旅程表の作成については宿題とし、1ヶ月後に発表させることにした。

旅行2日目午後の成田入国から8日目夕刻の成田出国までの行程を作成する、というより具体的な設定にしたためか、学生はあたかも自分たちの旅行計画を立てるように、活発に話し合っていたようにみえた。先の設定条件を満たしたうえで、自分たちが行ってみたい、あるいは行ったことのある場所を選んだグループもあれば、案内役というかたちで自身の出身地周辺の観光地をプランに組み込んだグループもあった。更に、現実味のあるプランを作成するよう促したことで、アクティヴな活動とリラックスできる時間をうまく織り交ぜたプランを紹介するグループもあれば、一つのテーマを冠した旅行プランを作成したグループもあった。また、発表時に配布された旅程表には、表をカラフルにして見やすくしたり、魅力的な観光地の写真を添付したりするなどの工夫もみられた。

発表時には、自分たちが発表を行うだけでなく、他のグループの発表を理

Japan Itinerary

Date	Time	City Location	Activities	Travel
April 20	1:15 pm			
April 21	4:30 pm	Narita Airport	Clear Customs	Arrive at Narita Airport
	Evening	Asakusa	Dinner	Train: Narita to Asakusa
	Hotel: Asakusa Hotel			
April 24	8 am	Tokyo	3 hr trip	Train: Tokyo to Kyoto
	Afternoon	Kyoto	Sanjusangen-do, Kiyomizuzaka, Minami-za, Gion, Ponto-cho (Geisha area)	
	Evening	Kyoto	Dinner	
	Hotel: Toji House			

Fig.2. 実際に使用した旅程表（一部を加工・抜粋）

解し比較できるよう、グループ単位で評価する「評価シート」を作成して配付した。発表グループのレジュメは見やすいか、説明は分かりやすいか、プレゼンテーション能力やグループの結束力の有無、そしてほぼ規定時間通りに発表が収まったかなどをそれぞれ5段階で評価させ、併せて配付した「質問・コメントシート」にも記入をさせた。こうした学生同士による評価やコメントは、例えば、通常のテキスト学習のなかで、教員と学生が設問について確認を行う前に、ペアやグループで分からない箇所を相談し合う時間を設けることと同等の効果を生むように思われる。すなわち、答えが導き出せない学生は、ペアの相手に対して自分が理解できるまで率直に疑問をぶつけ、答えの分かった学生は、どのようにその答えが導き出されたかを説明することで、自身の理解もより深まるという効果である。発表を聴いた学生は、ふと浮かんだ疑問を躊躇なく投げかけることができ、質問を受けた学生もまた、納得してもらえるよう説明に努力していた。発表から2週間後、授業時間の一部を割いて行ったレスポンスでは、行程表の記述方法や内容について教員側からも一通りのコメントをしたが、質問や改善点、長所などを含む学生同士の意見交換は有意義な時間となり、彼らには充実した表情が浮かんでいた。

5 筆記体習得はもはや不要なのか

数年前にアメリカ人夫妻から送られてきた手紙には、ネイティブであるアメリカ人でさえ、最近では文法やスペルを誤ることが多くなったと書かれていたことがあった。パソコンの普及により文字を手書きする機会が減ったことに加えて、パソコンソフトの自動修正機能もこの状況に追い打ちをかけているようだが、日本人でも、例えば漢字は読めても書けなくなってしまった、といった傾向がそれと同様のことに思われる。

この度の旅行でも、日本人が漢字で書くクレジットカードの署名や日本の押印文化に関する話題が発端となって、長時間移動の列車内で先に挙げたような話に及んだ。パソコンが主要な筆記ツールとなった今日、アメリカでは筆記体の授業時間が減少してきており、きちんとした署名ができない若者も増えているとのことであった。⁵ 日本でも適切な漢字の使用や文字を美しくに綴ることのできる人は減る傾向にあると伝え、筆記についてはいずれの国でも一昔前の人々の方が優れていたかもしれない、と互いに苦笑しながら話を終えたのであった。

そして、後期授業の準備を始めた頃、偶然にもこうした会話を思い出し、現在の学生はどのくらいの割合で筆記体を習得しているのだろうか、という疑問が浮かんだ。かつての義務教育では筆記体を習い、英語の授業でノートをとる際は筆記体で記していたと記憶している。けれども、やはりパソコンの使用が定着するにつれ、手書きの際は次第にブロック体で綴る機会も増えていったように思われる。また、大学の授業では学生全員が読めるよう、板書はほぼブロック体を使用するようになった。なお、2002年以降の学習指導要領では、筆記体を授業で教えるかどうかは任意となり、脱ゆとり教育後もそうした方針が踏襲されたため、筆記体習得のための授業は消滅してしまったに等しいといえるかもしれない。⁶ 授業では、筆記体の授業を行う前に、高等学校までの英語の授業で筆記体を習った経験があるかどうかを学生に尋ねたところ、経験があると回答したのは受講生24人中1名しかおらず、その学生も現在ではほぼ書くことができないということであった。⁷

手書きする機会そのものが減少傾向にある今日、筆記体を教える必要性がないという意見は日本のみならず、英語圏の国々でさえもあがっている。しかしながら、高等教育機関で英語リーディングやライティングの授業を行う立場としては、学生に筆記体に触れる機会を提供することは、幾つかの理由から有意義ではないかと考えている。まず自身の体験として、ネイティブによる筆記、とりわけ中高年層以上では、今なお日常的に筆記体が用いられており、筆記体を書かない人でも読む場面に遭遇する機会のごく身近にあるということである。富山は「インターナショナルな環境にあれば、種々さまざまな筆記体の字体を毎日目にし」、自身の英語圏での暮らしにおいては「日常生活及びアカデミックな生活ともに、『ネーティブの方』が筆記体を使うのを当たり前のこととしてみてきた」と述べている。そしてこうした「『ネーティブの方』の筆記体の日常使用の実態」は、現役学生のアンケートの回答にも共通にみられたという (101)。⁸ 公文書等の署名欄は筆記体で記されるものであり、学生の身近な場面についていえば、アルバイト先の店舗レジなどで外国人からクレジットカードの署名をもらう必要が生じるかもしれない。また、英語圏の有名人から色紙などにももらうサインも基本的には筆記体を崩したものが多いだろう。更には、この先英語圏の文学や歴史等を学ぶ機会があるとなれば、活字化されたもの以外はほぼ筆記体で記されており、判読可能な能力が必要となる。海外においても筆記体はもはや不要であるとい

う考えが浸透しつつある一方、筆記体の読み書きができることは教養人としての一種のたしなみであると考えられる節もあり、日本の大学生も同様に一通りの読み書きができることが望ましいのではないかと思われるのである。⁹ そうした意味で、少なくとも「指導にあたる者は、個人の認識や価値観によって最初から筆記体という選択肢を奪うのではなく、生徒本人に選択の自由を与え」るべきであろう（富山 102）。

6 筆記体習得の試み

後期の授業では、多少なりとも筆記体に触れられる機会を提供しようと筆記体の授業を試みたが、本授業の主要教材はあくまでもテキストであるため、筆記体学習に費やすことのできた時間は授業 1 回分とアサインメントに関する復習の数十分のみであった。学生には筆記体を学ぶ意義について説明した後、限られた授業時間と課題を通して、少なくとも読めるようになることと自分の氏名を綴れるようになることを今回の目標として欲しいと伝えた。現在では、筆記体の見本帳や英語の罫線ノートなどは、ウェブサイト上からダウンロードできるものもいくつかある。なお、なかには誤植も見受けられたので、その点はよく確認したうえで、授業ではそれらをプリントしたものをを用いた。

最初に比較的ブロック体に近く容易な文字について綴り練習をさせ、追って筆記体特有の綴り方のものを一文字ずつ黒板に綴って見せてから、プリントに綴る練習をさせた。次に、学生に綴り方が分かりづらい文字を挙げてもらい、それらの文字を再度綴って見せてから再びプリントに練習させるということをした。学生一人一人が適切に綴れているかどうか、教室を巡回しながらの授業であったが、器用に素早く綴る学生もいればゆっくりと丁寧に綴る学生もいて、練習スピードに差が出てしまったことについては今後の反省点となった。アルファベットの太文字と小文字を一通り綴り終えたら、二文字ごとに繋げて綴る練習、続いて頻度の高い簡単な語句や文章を綴る練習を行った。学生たちは手本を見ながらであれば比較的容易に綴れたが、全く白紙の状態では頻繁に手本を見返しながらでなければ綴ることは難しく、短い授業時間では決して習得できたとはいえない状況であった。筆記体を覚えるためには漢字の書き取りと同様に繰り返し書くという練習が欠かせないため、学生には全アルファベットの綴り練習と、自分の氏名及び “Happy

Birthday”など簡単な幾つかの語句を綴るプリントをアサインメントとして配付した。

2週間後の提出日、欠席した1名を除いて全員がこのアサインメントを提出した。当初は、綴り練習ができているかを確認するだけのつもりであったが、プリントを一枚ずつチェックしていくと、手本や指示通りにおおよそ書けている学生は半数程度であった。綴り練習では手本の字形から徐々に逸脱してしまっていたり、簡単な語句を綴る課題では、語句や文字の一部を飛ばしてしまったりしているものもみられた。近年では、英語に限らず、ある程度の集中力が必要とされる書き取り練習の機会そのものが、教育現場において減少してきてしまっているのかもしれない。綴り練習が最後の方で雑になったり、一文字ずつ着実に綴らないことで次第に語句全体が判読不能になってしまったりしているものについては、そうしたことにも一因があるのだろう。それぞれの学生のプリントに修正方法やコメントを書き入れて返却したうえで、多くの学生が苦手としている文字については改めて解説し、再度書き取りを行わせた。なかには律儀に全ての文字を繋げようとする不自然な筆記体もみられたので、文字同士の続け方についても説明した。こうした誤りは、課題で終わらせてしまうのではなく、授業内で練習や再度確認を行うといった双方向の作業でこそ解消できた点だったと実感している。そして最後に、学生たちの弱点箇所を克服するために有効だと思われる単語“stress”、“socks”、“chorus”などの単語を挙げて、もう一度練習させた。

先にも述べたが、限られた時間での今回の目標は、学生自身が名前を綴れるようになることと、筆記体を読めるようになることであった。このアサインメントを提出する際には氏名を筆記体で綴るように指示しておいたが、訓令式で氏名を記した学生が複数いたため、英語の授業ではヘボン式を用いるよう、綴り方と併せて助言した。続いて、筆記体を読む練習では、実際の手紙の一部をコピーして配布し、グループワークで手紙の読解に挑戦してみるように指示した。手紙は筆記体の手本ではなく、あくまでも一般人が書いたものであるため、読みにくい癖字もあれば一部がブロック体のように書かれた文字もある。しかしながら、実際に学生が今後読むことになるかもしれない筆記体は教科書の手本ではなく、おそらく誰かが書き綴ったものであり、生の英語に触れるという意味で、あえて手紙を教材として扱ったのである。綴り練習とは対照的に、学生たちはゲーム感覚で文字を判別しながら読んで

いき一喜一憂していたが、彼らにはいつしか自身が読解する必要がある筆記体に向き合った時、「内容が読めた！」という達成感を味わって欲しいものである。

結び

無論、日頃のテキスト学習においても、机上の学習という印象で終わってしまわないよう、身近な話題や有用な情報を織り交ぜながら授業を行うようにしている。しかしながら、今回扱った幾つかの内容は、いずれもアメリカ人旅行者とのやりとりから得られた実践的な英語教材であり、より意欲的に授業に取り組む学生の姿勢がみられたように思う。少なくとも、2020年の東京オリンピックに英語ボランティアとして参加しようとする学生には、こうした教材は有意義なものになるであろう。だが、年々外国人観光客が急増している現状を踏まえると、一步街へ出たあらゆる学生にとって、英語で尋ねられ教えるような機会がますます身近なものとなってくるのではないだろうか。そうした実際の状況や場面を想定しながら、今後も実践的かつ効果的な教材を見つけ提示していきたい。

注

- ¹ 文部科学省の「単位制度の実質化」の方針に基づく傾向である。詳しくは「第2章第2節 教育課程編成・実施の方針について」等を参照されたい。
- ² 授業外学習の時間数に関する海外での調査結果との比較では、「日本の大学生の学びの特徴として、授業内学習時間の圧倒的多さも授業外学習を阻む要因の一つ」（野田 22）との指摘がある一方で、「約6割の大学が、授業内外において課題やテストを課すことが学生の授業外学習時間の増加に結びつく取組」と回答しているとのことである（26）。こうした現状を総合的に考えると、実質的には授業時間の確保に加えて各授業での課題量が増加し、学生には負担増となっていることは明らかであろう。「単位制度の実質化」が形骸化しないよう、また少なくとも学生が能動的に授業外学習を行えるよう、授業内容やアサインメントについては教員側にも一層の工夫が求められるだろう。
- ³ 旅行のために検索した時点では、道後温泉のウェブサイト上に明記され

ていたと記憶しているが、現在ではその記載が見当たらない。なお松山市ホームページには、「市長へのわがまちメール」に寄せられた苦情に対して、マナーは守られるべきだとしながらも「当施設では、公衆浴場法に基づき伝染性患者と認められる人や、松山市公衆浴場法施行条例に基づき泥酔者など他の入浴者に支障を与えるおそれがある方は、入浴をご遠慮いただいておりますが、刺青を入れた方の入浴については、法や条例などで制限する規定がなく、特に、市が管理・運営する公共の施設としては、刺青だけの理由でご入浴のお断りをしていないのが現状です」との回答があり、依然として規制等はみられない。

⁴ 海外では、自国の文化や歴史について明瞭に説明できる人が多いと実感させられる。学生には、高い英語運用能力を習得することのみを目標とするのではなく、むしろ英語を用いてどのようなことを伝えたいかを日頃から意識して学んで欲しいものである。

⁵ アメリカでも「高校生の7人に1人しかアルファベットを筆記体で書け」ず、「今では大半の小学校が英習字の授業に『1日10分以下』しか費やしていないという」(沢田 66)。

⁶ 近年の筆記体教育の傾向については学研出版サイトのコラムにもあるが、筆記体を習得した世代が保護者となり、現在の学校教育で学ばないことに疑問を抱くケースも多いようである。

⁷ Tannerらによる、筆記体習得率についての大学生の自己評価に関する調査結果では、大学教員の想定より読み書きのできる学生が少ないという結論が示されているが、現場ではこの調査の数字よりも習得している学生の割合は少ないかもしれないという印象を受ける。

⁸ 『週刊ダイヤモンド』で特集された「学力大不安」には、「メールの時代に筆記体が必要なのかという議論も可能だが、生身のコミュニケーションで筆記体に会わないことはありえない。国際社会、英語教育とこそさら熱心なはずの日本人が、読めない文字があるとはいかにも間抜けである」(38)と、辛辣ながらも的を射たコメントがある。

⁹ アメリカでの筆記体教育に関する賛否については、*New York Times*のウェブサイト上に掲載されている両者の意見が、その明瞭な一例として挙げられる。

引用文献

- “The Opinion Pages, Room for Debate: Should Schools Require Children to Learn Cursive?” *New York Times*, 30 Apr. 2013. www.nytimes.com/roomfordebate/2013/04/30/should-schools-require-children-to-learn-cursive/cursive-handwriting-is-a-cultural-tradition-worth-preserving.
- PR Center ed. “Welcome to Onsen!! : A Guide for Enjoying Japanese Hot Springs.” Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism Hokkaido District Transport Bureau, 2008. *Hokkaido District Transport Bureau*. www.tb.mlit.go.jp/hokkaido/bunyabetsu/kankou/gaikokuzin/onsenguide/index.html.
- Tanner, Paul, Takehiro Sato and Satoko Osawa. “Can Your Students Read Cursive Writing?: Survey of University Students Concerning Cursive Writing Literacy” *Explorations in Teacher Education: JALT Teacher Education and Development SIG Newsletter*; vol.19, issue 2, 2011, pp.4-12.
- 相澤美穂子「外国人の温泉に対する意識—DBJ・JTBFアジア8地域・訪日外国人旅行者の意向調査より」『公益財団法人日本交通公社』2016年2月25日、www.jtb.or.jp/research/theme/inbound/inbound-onsen。
- 大坪亮、佐藤寛久、柴田むつみ他「筆記体が読めない今の大学生—補習教育が常態化した最高学府」『週刊ダイヤモンド』第96巻14号、2008年、38-39頁。
- 学研出版編集部「第16回 英語の筆記体って、今は学校で習わないの？【英語】」『学研出版サイト』2010年7月21日、hon.gakken.jp/reference/column/Q-A/article/100721.html。
- 国土交通省観光庁観光戦略課観光経済調査室『訪日外国人の消費動向 平成29年 年次報告書』2018年3月、www.mlit.go.jp/kankocho/siryoutoukei/syouthityousa.html。
- 沢田博「沢田博と英字紙を読む 筆記体の危機」『世界週報』第87巻第43号、2006年、66-67頁。
- 富山真知子「筆記体が読めない、書けない大学生」『大学時報』第313号、2007年、98-103頁。
- 野志克仁「わがまちメール 刺青をいれた人の道後温泉利用」『松山

市』松山市役所、2016年11月18日、www.city.matsuyama.ehime.jp/wagamachi/detail/2168.html。

野田文香、洪井進「『単位制度の実質化』と大学機関別認証評価」『大学評価・学位研究』第17号、2016年、21-33頁。

文部科学省「第2章第2節 教育課程編成・実施の方針について—学生が本気で学び、社会で通用する力を身に付けるよう、きめ細かな指導と厳格な成績評価を」中央教育審議会大学分科会（第71回）議事録・配付資料 [資料4-2]、www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003/004.htm、アクセス日2018年3月10日。